

## AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2018年度第3回研究会（通算第9回目）

日時：2019年3月2日（土）14:00-18:30, 2019年3月3日（日）9:30-13:00

場所：東京外国語大学 本郷サテライト 5F セミナールーム

出席者：鶴田 格、石川博樹、安溪貴子、小松かおり、佐藤靖明、田中利和、松田正彦、藤本武、池上甲一、末原達郎、坂梨健太、足達太郎、原子壮太

### 発表1：原子壮太（一般社団法人 日本森林技術協会）

#### 「多様性を担うもの—タンザニア・ルフィジ河上流域のベナの稲作—」

タンザニア南部の焼畑農耕民ベナの山村には、コメを自給的に生産し主食としてきた地域がある。そこに暮らす人々は、およそ50種におよぶ多様なイネ品種を保持し、それらを使い分けながら稲作を営んでいる。本発表では、地域社会においてイネ品種がどのように活用されてきたのか説明した。

この地域では栽培上の諸特性（栽培適地・早晚性・耐旱性など）の使い分け、「同一品種の連作回避」というこの地域固有の慣行、生態環境の不確実性や社会・経済の変動への対処などの理由から、世帯は平均3~4種を栽培することが一般的である。コメの消費に目を向けると、この地域には9つものコメの調理・加工方法があり、また、「同じコメ(品種)だけでは飽きる」と住民は語る。すなわち食生活においても多様性を嗜好する傾向がある。世帯が保有するイネ品種は、互助労働の場などで交換・贈与されることで村落内を流通し、世帯はこうした活動に参加することでイネ品種を得ることができる。また、しばしばそうした場では、イネ品種の交換・贈与によって社会関係が取り持たれることが観察されている。

このように、多様なイネ品種は自給的稲作のすべての過程で必要とされ、世帯間の紐帯の確認と強化にも用いられていた。

### 発表2：石川博樹（AA研）

#### 「文字記録に見るエチオピア諸王国の農業：アクスム王国とソロモン朝エチオピア王国の比較を中心に」

現在エチオピア北部ではテフと呼ばれる穀類を中心とする農業が行われ、テフの粉からつくられるパンケーキ状の食品であるインジェラが食文化において重要な地位を占めている。17世紀前半にエチオピア北部のソロモン朝エチオピア王国を訪れたイエズス会士たち

の報告からは、当時同王国においてテフを主体とする農業が営まれていたことを確認できる。しかしこのようなテフを主体とする農業・食文化がどのようにして成立のかという問題は未解明のままである。本報告では、この問題の考察のため、1世紀にエチオピア北部のアクスムを都として成立したアクスム王国とソロモン朝エチオピア王国の農業の比較を行った。検討の結果、少なくともアクスム王国の衰退が始まる7世紀まで、同王国ではコムギ・オオムギの栽培を主体とする農業が営まれていたこと、アクスム王国とソロモン朝エチオピア王国の中心領域はいずれも温帯夏雨気候帯に位置するものの、前者よりも後者はより温暖湿潤で多様な作物の栽培が可能であり、牧畜にもより適した環境にあったことが判明した。アクスム王国衰退期からソロモン朝エチオピア王国成立までの約600年間は文字記録の乏しい時期であるため詳細は明らかではないものの、この間にエチオピア北部のセム系言語話者がより温暖湿潤な地域に生活の拠点を移して農耕と牧畜に対する依存を強め、その中でテフを主体とする農業・食文化が醸成されたものと推測できる。

**発表3：佐藤靖明（AA研共同研究員，大阪産業大学）**

#### **「ウガンダにおけるバナナを基盤とする農耕社会の現状と課題」**

ウガンダには、バナナを基盤とする農耕社会が広がっている。この特徴を歴史、食文化、農耕体系の観点から整理するとともに、近年みられる状況について報告した。

東アフリカ大湖地方のバナナを基盤とする農耕社会は、人口密度がアフリカ大陸内でとくに高い地域と重なっており、人口支持力の高さが指摘されてきた。歴史言語学的には、数百年から1000年という長い時間スケールの中で、その農耕と社会のしくみが形成されてきたと考えられる。掛谷誠は、アフリカ農耕民の特質をとらえる際に生活様式区分として「インテンシブーエクステンシブ」という軸を設定したが、これに照らし合わせてウガンダのバナナ農耕社会をみると、料理、土地利用、栽培品種などの点から、「エクステンシブ」と「インテンシブ」の諸要素の独特な組み合わせによって構成されていることが分かった。近年では、人口の稠密化や、病虫害の拡大によるバナナの生産量の減少が各地で報告されており、ウガンダ中南部の現地調査では、土地問題が顕在化するとともに、世帯内・世帯間での協働の活発化、栽培種の割合の変化といった住民の対応も観察された。

報告の最後には、ウガンダ国内における遺伝子組換えバナナの開発と、2017年10月にウガンダの国会で関連法案が可決されたことを紹介した。

**当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。**

**Copyrighted materials of the authors.**